



▶場所 水明台1丁目下の斜面
 ▶交通 能勢電鉄「平野」駅前バスターミナルから阪急バスで約7分。「水明台1丁目」下車後、南へ約100m。
 ※車での来場は不可

ニュータウンの桜がくれたもの ふるさとの森

あなたの生まれたまちはどこですか。
 胸が熱くなる記憶。ふるさとは、人の心にいつまでも残ります。
 昭和40年代以降、私たちのまちに多くの人に移り住んできました。
 生まれ育った土地を離れ、新たなまちで歴史を紡いできました。
 半世紀近くが経ち、新たなまちは今や次の世代のふるさとはず。
 かわに育てつ子どもたち。
 彼らに残すべきものは何なのでしょう。

溪のサクラを守る会

20年6月設立。水明台1丁目下の斜面を活動拠点に、エドヒガンの保護や緑地の整備などを行う森林保全活動グループ。多田グリーンハイツ住民を中心に、市内外から60人が所属している。毎週木曜日午前中(原則)の活動には約30人が参加。毎年春のエドヒガン公開と森のコンサート(5ページ)を開催している。

問い合わせ 会長の西澤さん ☎(792)8861

Chapter 1 溪を守る



西澤孟治さん
 昭和48年、多田グリーンハイツに自宅を購入。退職後、森林ボランティアなどを経験し、里山について学ぶ。溪での活動が認められ、平成28年度緑化功労者表彰の林野庁長官賞を受賞。

計画的に造られた住宅街の端、小さな門をくぐると大自然が突然広がる。手作りの階段を頼りに急斜面を下り、目に映るのは小さなあずまやとエドヒガンの森。
 ニュータウン「多田グリーンハイツ」には、里山があります。溪谷にひっそりとたたずむエドヒガン群落。市の天然記念物です。
 かつては、ネザサやアラカシが生い茂る、薄暗い雑木林でした。分け入る道はなく、数メートル先も見えません。自生したエドヒガンは、光を求め、上に上にと枝を伸ばしていました。
 必死で生きる桜を守りたいと考えた人がいます。「溪のサクラを守る会」会長の西澤

孟治さん、75歳。仲間と一緒に10年以上にわたり整備を続け、誰も近付かなかった森を憩いの場に変えました。
 溪は西澤さんの生活の一部。敷地を端から端まで歩いて見回ります。
 椅子、机、標識、階段、トイレ、全てメンバーの手作り。間伐した木材を使っていきます。小屋に据えられた机には、成長する桜や自生する植物を撮り集めた冊子。草を刈り広げてきた敷地は5万平方メートル以上となり、植樹などにより数を増やした桜は総勢250本にも上ります。
 「ふるさと」の森になってほしい」。西澤さんが活動を続ける理由です。
 昭和40年代に開発が始まっ

た多田グリーンハイツ。現在6000世帯を数えます。大阪近辺に通うサラリーマンのベッドタウンに、多くの人が移り住みました。会のメンバーの大半は移住者です。「昔話になったら、それぞれの故郷のことを話すんですよ。ここに住む人は皆、場所は違っても、大切な記憶が故郷にあるんじゃないですかね。グリーンハイツで育つ子どもたちにも誇れる何かがあればと思うんです」
 開発から半世紀近くが経ち、移り住んだまちは子どもや孫の世代にとって今や「ふるさと」となりました。「溪のサクラを守る会」では、陽明・緑台小学校の3、4年生を受け入れています。地区内に住む子どものほとんどが里山の整備やエドヒガンの植樹を体験してきました。春の開花時に訪れる多くの卒業生。初めて受け入れた子どもたちは、もう高校3年生になりました。
 手付かずの荒地を子どもたちの思い出の地へ。「植樹は子どもたちの足跡ですから」。西澤さんは記念植樹のプレートを塗り直していました。

住民をつなぐ行事は財産

Relationship

「エドヒガン群落の一般開放は、夏のサマーカーニバルなどと並ぶ風物詩になっています」

毎年春になると一般に公開されるエドヒガン群落。ここでのお花見が、地域のイベントとなりつつあります。

「行事は人と人をつなぐ役割を担っているんです。ご近所同士のつながりがあるから、ずっとここで暮らしている。そういう人もいると思います」

大村さんも、宅地開発が始まったころに移り住みました。今や地域の5,000人以上が来場する夏祭り「サマーカーニバル」も、交流を深めるために始まったものだそうです。

「夏祭りには、騒音などの問題も伴います。それは溪での活動も同じ。ご近所にご迷惑を掛ける部分があるのも事実です。でも、つながりを生む場所として、将来にわたって必要な財産。みんなで認め合いながら、守っていければいいなと思います」



緑台・陽明コミュニティ協議会
会長

大村衣子さん

人の手で守られる希少種

Conservation

猪名川沿いに広がる急斜面は、市が管理する緑地。現在は「溪のサクラを守る会」の協力を得て、里山の姿を保っています。

「エドヒガンは保護が必要な希少種。もし会の活動がなければ、枯れてしまっていたでしょうね」

人の手によって新たな生態系が維持されるようになりました。今では、新しく自生したエドヒガンや、ギンラン・アマナといった貴重な植物も見られます。

「他にはない、人と自然の共生の場。力を合わせ守っていきたくて考えています」



公園緑地課
課長

釜本雅之

1_ 手作りの水鉄砲でエドヒガンの水やり 2_ 桜の成長を観察し、20年後の溪を想像する 3_ 間伐した枝は堆肥に。選定ばさみの手入れ方法も教わる 4_ 全員に配られるペンダントは、環境体験学習を終えた証。一人一人の名前と「特別会員」の文字が刻まれる 5_ 溪に落ちた種から育てた桜の苗



学ぶ、つながる、守る

「溪のサクラを守る会」の保全活動が始まって10年。生まれ変わったエドヒガンの森がもたらしたのがあります。溪を見守ってきた3人に話を聞きました。

うです。好きな場所だから守りたいって」
今年2月、「J Aバンク兵庫小学生の環境チャレンジ発表大会」に出場。活動内容が認められ、44校の中から上位4校に選ばれました。溪での活動は、子どもたちの間で受け継がれています。「兄弟から聞いていて、『ついに溪デビューだ』と楽しみにしている子も多いんです。全校生徒に活動発表をした時

には、次の3年生に託すよと、先輩の顔になっていたのが印象的でしたね」
溪を次の学年に継ぎ、4年生になる子どもたちには、特別な感情が生まれています。「環境体験学習は1年間だけ。でも、学習を終えた子どもたちは、全員が溪のサクラを守る会の特別会員です。おとなになっても、溪を守りたいと思いつけてくれる子が、きつといると信じています」

兄弟から聞く溪デビュー

受け継がれる活動。進級生は特別会員



緑台・陽明小学校の3年生は、毎年溪で環境体験学習に取り組みます。教えるのは、溪のサクラを守る会のメンバー。登下校の見守りに立つ人や、近所の人でもあります。「本当の孫のように温かく接してくれました。多田グリーンハイツに住む方が多く、子どもにとっても知らない人ではないんです」
最初は遠足気分です。足を運んだ子どもたち。回を重ねるうちに、気持ちの変化が現れたと教諭の早川さん。「溪を流れる猪名川沿いに捨てられたごみの山を見て、シヨックを受けていました。ごみを拾いながら、自分たちが溪を守らなきゃと感じたよ

Chapter 2 溪を訪れる



緑台小学校 教諭

早川仁実さん

溪でのイベント

4月8日回まで 午前9時～午後3時
市天然記念物のエドヒガン群落を公開

桜の開花に合わせて、溪を毎日開放します。高さ20mを超えるエドヒガンやオオシマザクラ、2mほどの花を付ける野生のフデリンドウなども見られます。弁当や飲み物の持ち込みが可能です。

5月13日回 午後1時半～3時
若葉の下で「森のコンサート」を開催

5月13日回の午後1時半から、溪に作られた特設ステージで音楽コンサートを開催。新緑の森で、市内のコーラスグループやハンドベルの会、アンサンブル・ローザ他が、歌声やフルートの演奏などを披露します。川西音楽家協会が協力。

問い合わせ

溪のサクラを守る会
会長の西澤さん
☎(792) 8861

桜の野生種 エドヒガン

膨れた柄が特徴の早咲き桜

野生の桜の一種。3月下旬から4月上旬にかけて淡い紅色の花を咲かせ、柄がヒョウタンのように膨れるのが特徴。樹皮には、細かい縦の裂け目が多く入る。長寿なことで知られ、日本最古級のものには樹齢2,000年ともいわれる。多品種の母種として使われ、

オオシマザクラとの交配でソメイヨシノが生まれた。

絶滅の危機に瀕する群落

猪名川上流域の群落は非常に珍しく、県版レッドデータブック（絶滅の恐れがある野生生物をまとめたもの）にエドヒガン群落の分布地(Bランク)として記載。また、水明台1丁目のエドヒガン群落は市指定の天然記念物に指定されている。



Chapter 3
溪を記憶する



陽明小学校 卒業生
折戸優子さん

生まれ育ったまちに広がる森に
夢中になって遊ぶ子どもたち
ここでしか作れない思い出があります

「7年経った今も、植えた

「じいじが来てくれて本当
にうれしかった。ほとんど知
らなかつた植物のこともすこ
く勉強してくれて。一緒に
なって、溪のことを考えてく
れるようになりました」
小学4年生になり、学年全
員でエドヒガンを植樹するこ
とになりました。この溪で初
めて行われた、子どもたちに
よる植樹です。

多 田グリーンハイツで生
まれ育った折戸優子さ
ん。大阪の高校に通う3年生
です。
溪に初めて来たのは、小学
3年生の環境体験学習の授
業。草木が茂っていて、まだ
階段や通路も完成していな
かったそうです。

たこともあると笑います。
年に数回の溪での授業。回
を重ねるうちに、ここで過ご
す時間が好きになっていった
折戸さん。1年間の環境体験
学習を終え、春を迎えます。
エドヒガンの開花に合わせて
始まった一般公開。友達を
誘って溪に出掛けました。

溪の入り口では木彫りの
フクロウが出迎える



授業が終わっても
毎日通った場所

「20年は持っても、100年は分らない」
西澤さんの言葉です。
新たなまちに生まれたふるさとの森。
いつか、子どもたちが溪の記憶をたどる頃
満開の桜は咲いているのでしょうか。
ふるさとの将来は次の世代へと託されます。



1_ 樹高約20mのエドヒガン。高い場所に枝葉を伸ばしているのは、常緑樹に覆われていたところの名残 2_ 手作りの階段 3_ 来場者の休憩場所となる小屋 4_ 溪の南側には菜の花畑が広がる 5_ 6_ 公開の前に、間伐した木材で遊歩道に柵を設ける 7_ 土地開発から逃れ、移植されたユキワライチゲ。溪では何種もの野草が見られる